
とある不幸少年の双子の兄で魔神で。

神の如き強者（アザゼル）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある不幸少年の双子の兄で魔神で。

【Nコード】

N0243X

【作者名】

神の如き強者
アザゼル

【あらすじ】

気が付いたら上条家の長男、不幸少年の双子の兄になってた・・・

しかも転生する際におねーさんにヤバイチート特典、“聖なる右”
“邪なる左”“聖人の肉体”を手に入れて・・・

いや。おねーさん、フィアンマさんに睨まれるでしょうが。

アレイスターにも目をつけられるだろうがッ！！死亡フラグも乱立

だし！！

だが負けぬ！藍しゃまとモフモフ、キャッキャウフフな毎日を送ってやる~~~~！！

基本は魔術の原作沿いでいきます。

科学は書くかどうか未定。

プロローグ（前書き）

熱いパトスが止まらなかった。

反省も後悔もしない！

プロローグ

どうも。はじめまして皆さん。

皆さんがもし、テンプレ的なチート転生したらどんな反応をしますか？

1：狂喜乱舞する。

2：俺TUEEEEE！で無双する！

3：原作ブレイクやヒロインをどう落とすか考える。

・・・え？俺？俺は・・・

4：戸惑って母ちゃんのおっぱいを飲む。

だね。

昨日の夜に東方緋想天プレイしてたらいきなり停電でどこからか飛

んできた槍が刺さって意識を失った。こんな状況で、なんで槍？って思ったが意外と冷静に死を受け入れられたね。

そしたらほぼ全裸の似非イケメソの狩。に似た奴が現れて「あ、ごめ。殺しちゃったwww」って言われてネギをケツに差した俺は悪くないはずだ。

で、上司らしき女性（美人で巨乳。↑ここ大事！）にお詫びとして何か願いを叶えてくれることになった。

「藍しゃまをモフモフさせてください！！」

「却下です」

「え！！そんな馬鹿・・・いいやああああああ！！」

つてのが最後のやり取り。

チート特典なしで転生は気が重いよねーさん・・・

で。目を覚ましたらどこかで見たことがある女性に抱かれておっぱいを飲んでたわけだ。

あのおねーさんが何かしたのか頭に変な知識があった。

“ 聖なる右 ”

・・・フィアンマかよー！！右方のフィアンマ来ちゃったよ！チート特典あったよおおおおお！！

・・・ん？待てよ。まだ何か・・・

“邪なる左”

・・・え？何このいかにも魔王が持つてそうな能力？

“よこしま邪なる左”？“聖なる右”と何か関係があるの！？

怖い！怖いよおねーさん！どんな能力付けちゃっててくの！？

「あらあら。“刀夜”さん、“翔麻”が頭を抱えていますよ」

「おお母さん！“当麻”は笑ってくれたぞ！」

・・・よし。待とうか。“刀夜”に“当麻”？

まさかこの女性の名前は“詩菜”さん・・・か？

え？まさかまさかの上条家？“聖なる右”の元ネタのとあるに来ちやったの？

いやいやいや！ないない！姓名は違つかもしれないぞ！もちつくんだ俺よ！望みをすて・・・

「上条さーん、二番のお部屋でお願いしますねー」

「あ、はい！」

ダアアアアウトオオオオオ！！間違はなく上条家の皆さんでし

たアアアアアア！！

詩菜さんは俺、刀夜さんは赤ん坊、おそらくは当麻を抱いて病院の診察室みたいな場所に入った。

「まずは上条さん、ご出産お疲れさまでした。えーと、翔麻君が兄、当麻君が弟の双子になりますね」

「（ぬあにいいいい！？不幸の代名詞である当麻の双子の兄だとお！？）」

「・・・はい。軽く検査をすれば帰っても構いませんよ」

「ありがとうございます先生！」

刀夜さんがなんかペコペコ赤べこみたいに頭を振ると俺を抱いて隣の部屋に移った。

詩菜さんも当麻を抱いて一緒に入ると体重計やメジャーとかで体を調べられた。（ち。こ見られて看護婦さんに微笑ましい笑いをされると地味に落ち込んだ。）

お医者さんや看護婦さん、刀夜さんや詩菜さんが話しているのを聞き流しながら特典を整理してみた。

“ 聖なる右 ”

“ 邪なる左 ”

“ 式神使役 ” （八雲藍限定）

“ナデポ・ナデホ”（ナデホは撫でるとホッと安らぐこと。）

“聖人の身体スペック”（才能もほぼマックス。限界はあるがかなり伸びる。）

“黄金律”

・・・どないせーゆーねん。

“聖なる右”と“邪なる左”でもあれなのに“聖人の身体スペック”って何よ？

ナデポとナデホって・・・

だ　が　！　！　“式神使役”はマジ感謝！藍しゃまをモフモフできる！
よっしゃ！これで勝つる！！

黄金律もあるから金には困らないはず！

死亡フラグ満載なとあるワールドだが生き残ってやる！！

「うふふ、刀夜さん。翔麻がやる気を出してますよ」

「おお！なんか炎も見える！さすがは母さんの子だな！」

「あらあら。刀夜さんの子でもありますよ」

・・・まずはこのストロベリーな空間に耐えることから頑張ろう。
我が弟当麻・・・無邪気で羨ましいぜ・・・

プロローグ（後書き）

かみじょーさんの双子の兄でいきます。

翔麻は藍しやまを愛でることになりそ。

1（前書き）

次の投稿はたぶん来週の日曜日。

ストックが貯まったらまたわからんけど。

・・・ごきげんよう。前世の名は■ ■ ■。現在は上条 翔麻^{しょうま}とあるの世界に生まれ落ちて二年が経ち、わたくしは二歳になりました・・・

双子の弟の当麻も二歳になり、すくすく育っております。何の悩みもなく、親父と母さんの有り余る愛情を注がれ、今日も生きています・・・が。

「あらあら。刀夜さん、ケチャップがついてますよ」

「おお！すまんな母さん！」

・・・このストロベリーな空間をどうにかしやがれえ！！何をするにしてもイチヤイチヤ！食べるときもイチヤイチヤ！テレビを見るときもイチヤイチヤイチヤしやがつてええええええ！！ためーら何歳だ！？俺らを生んでまだ子供作る気か親父イ！もうやめてくれ・・・この空間、耐えられねーよ・・・

「にいちや？」

「おお・・・とうま、にいちやんをたすけてくれ・・・」

「にいちや、ぽんぽんいたいの？」

「もうすこしうえがいたいよとつま・・・」

まだ二歳だから舌つ足らずだが、俺も当麻も少しは喋れる。

俺はきちんと話せるがあくまでも演技だ。立つて歩けるし、字も汚いながらも書けるが・・・あまり見せるとないとは思うが捨てられるかもしれないからな。

体は聖人だし、精神も大人に近かったから見れば異端児にしか見えんわ・・・

少しずつだが、親父の書齋に潜り込んで本を読み漁ったりしている。聖人の廃スベックな才能のおかげか、苦手だった英語もすらすらと覚えられた。

「じゃあ、今日は翔麻と入りますね？」

「おお！なら当麻と入るのか・・・よかつたら皆で入らないか？」

「（エロ親父め・・・）」

「あらあら。そしたら母さん、頑張っちゃうわね」

「（何を！？お母様、それだけはヤメテ！？生殺しなんて生温いから！教育に悪いよお母様アアアアアアア！！）」

お母様、詩菜さんがたまに天然発言をするから心臓に悪い。

前なんか親父と俺らの前でやるうと（何をとは言わない）するからな・・・天然ほど始末に追えん。

親父をじいじ発言で落ち込ませた隙に母さんと風呂に入ることにした。

残念ながらマイボディは三歳児なので一人では風呂には入れませんが母さんの若々しい肢体が見れるから役々……げふんげふん！まあ、ともかく。死んだ親父を放置して当麻も一緒に入ることになった。

……にしても母さん、本当に【バキユウウン！！】歳か？若すぎね？二十歳と言っても違和感ないぞ？
親父。よく結ばれたなあ、おい。

「にいちや！あたまをあらったげる！」

「あらあら。当麻さんは翔麻さんが好きなのね」

「（……母さん、頼むから胸を押し付けて体を洗うのはやめてくれ。俺の心のマグナムが火を吹くから）」

「んしょ、んしょ」

ちなみに俺は全裸で全裸の母さんの膝に乗っけられて体を洗われ、当麻は一生懸命頭を洗ってくれた。

……なにこのカワイイ生物？^{ナマモ}将来フラグ建築士となるリア充に不覚にも萌えたぞ？

シヨタの扉を開かないように気を付けよう。

母さんはすでにシヨタコン、というか俺コンに近い感じになってるからな……そちらも警戒せねば。

「にいちやにいちや！こんどはおれのあたまあらって！」

「はいはい」

「あらあら。本当に仲がいいわね・・・」

俺は母さんの膝に乗せられたまま前に座る当麻の頭をガシガシと洗う。

母さんは手を頬に当てて聖母の微笑みで俺達を見ていた。

・・・ですがお母様、俺の体をむやみやたらに触るのはやめてくれませんか？

そう言えば親父はフラグ建築士（免許皆伝）だったよな？前も散歩に行ったらフラグを建てて母さんに睨まれてたことがあった・・・いや、まさか・・・な。

当麻のフラグ体質って親父の遺伝じゃないかって思い始めた。
ラノベのSSとかでもそれらしいのがあったし、詩菜さんになんかされてたような・・・

・・・まさか、当麻だけでなく俺にも親父のフラグ建築士体質を受け継がれているのか・・・？

だとしたらNICE BOAT ENDになる可能性が大かつ！！
ヤンデレ女性に背中を刺される可能性があるのかアアアアアアア
！！

嫌だ！親父のフラグ建築士体質嫌すぎる！！

「じゃあ中に入りましょうか。当麻さん、おいで」

「うん！」

「（ないない。親父のフラグ建築士体質は当麻だけに受け継がれているはず。俺がそんなの受け継いだら当麻以上に厄介事に巻き込まれる！）」

「あら？翔麻さん、どうしたのかしら？」

「ううん。なんでもないよかあさん」

母さんに返事をする抱き締められたまま、ブクブクする。

母さんの柔らかいおっぱいが心地いいです。乳児の暗黒黒歴史は嫌だったがまたしゃぶりたいものだ。

・・・この発言・・・俺、変態か？

「じゃあ出しましょうか。のぼせたら大変ですし」

「わかった」

「わかったー！」

風呂から出ながらチート特典について考える。

聖人のスペックは理解はしているが問題は“聖なる右”と“邪なる左”だな。

前に使おうとしたら頭に激痛が走って鼻血だらだら出して母さん達を心配させたし。

どうやら体が完成してないのと魔力不足が原因だと仮定できる。

使った瞬間に体に宿る魔力が急激に無くなり、それに耐えられなくなつて頭がオーバーヒートしたんだろう。

この二つと“式神使役”以外は大体確認はできた。

聖人のスペックは学習する際に嫌と言うほど身に染みだし、黄金律は散歩の途中に拾った宝くじが一等だったことがあったしな。

「・・・親父エ・・・」

くまさんのプリントされたパジャマを着てリビングに戻ると親父が缶ビール飲みながらテレビを見て黄昏ていた。

その背中には哀愁感がありすぎて不憫になるほど小さくて儚かった。ついつい子供口調ではなく素で声を出してしまうほどに涙を誘われた。

仕方がないので今日は親父と寝ることにした。

母さん、親父が可哀想だからわかってくれ。そんな泣きそうな顔されても困るから。

当麻がいるから二人で・・・ね？

俺は渋い顔をして寝る親父に抱き締められながら夢の中に旅立った。
・・・親父。髭が痛い・・・

くそっ！早く藍しゃまの尻尾を抱きながら寝たい！！

1（後書き）

口調合ってるかな？

刀夜は不憫な親父のポジションで詩菜は親バカ&禁断の親子愛のポジションで。

当麻はしばらく癒していきます。

2（前書き）

タグとあらすじを変えました。

詩菜さんはマジショタコンですね。

親父が不憫すぎる・・・当麻もなんかヒドイ。

おはよう。上条 翔麻でございます。

また親父と寝た日から（エロい意味ではなくて）さらに時間が過ぎ、当麻共々四歳になりました。

「いくぞ〜翔麻〜！」

「いいよ〜！」

現在は親父と母さん、当麻で広々とした自然公園でのんびりとピクニックに来ている。

最近は大麻が妙にトラブルに巻き込まれるため、気分転換に遊びに来たのだ。

俺と親父はゴムボールを使って簡易野球をしている。

母さんと当麻は少し離れた木の下でビニールシートを敷いておやつを食べながら見ている。

「それ！」

「・・・きゅぴん」

親父がアンダースローで投げたへろへろのゴムボールを見て目をキ

ラリと光らせた。
手に持った武器^{バット}を振りかぶって・・・！

「（食らえやクソ親父イイイイイイイ！）」

「うへるばあああああ！？」

ゴムボールを打つとポシュツと何かが抜ける音とパスンという音と共にゴムボールは吸い込まれるように親父に当たった。

場所は・・・股間。

ゴムボールとはいえ、発展途上の聖人の筋力で打ったからとんでもないスピードで親父の股間に当たっただろう。
親父は股間を押さえて蹲り、プルプル震えながらなんとか親指を立ててこちらに向けてきた。

「な、ナイスバッティングだ翔麻・・・ガクッ・・・」

「・・・すまん親父。手加減を間違えたわ」

「すーいーにいちゃんすーいよー！」

「あらあら」

俺は憐れんだ目を親父に向け（↑原因コイツ）、当麻は親父を完全に眼中なしではしゃぎ、母さんはいつものように手を頬に当ててのほほんとしていた。

たまたま来ていた別のファミリーの親父さんが憐れんだ目で見ていたのは余談である。

気絶した親父の足を掴んで引き摺りながら母さん達のところに戻ると当麻がはしゃぎながら親父を踏んでいた。

・・・自分の子に引き摺られる、踏まれる親って惨めだね。

「あらあら。翔麻さん、顔に泥がついてますよ。こっちに来なさいな」

「うぉあ!？」

親父をビニールシートの上に乗せると当麻は馬乗りになってどーんどーん言いながら親父の腹にダメージを与えていく。

それを内心、笑いを噛み殺して見ていると母さんに引っ張られ、膝に乗せられた。

母さんは飯が入っていたバスケットからハンカチを取り出すと顔を拭いてくれた。

・・・でもね、お母様。俺は18+4歳なんですからちーんはしませんって。

はい、ちーん。って言われてもやんないからね？母さん、頼むから

ハンカチを鼻の中に入れてくれ。息ができん。

「ぶべっ・・・か、母さん！息が！息ができないから！」

「あらあら」

母さんはのほほんと笑いながらハンカチをどけるとナデナデと頭を撫でてきた。

駄目だ・・・我が母上ながら行動パターンが読めん。
恐るべき天然お母様！！

「どーん！どーん！」

「・・・いやいや、当麻。やめたげなさい。親父が死にかけてるから」

「し、翔麻・・・母さん・・・助け・・・ぐげぶっ！」

「あらあら。刀夜さん、楽しそうですね」

「なんで！？母さん、なんでそうなるの！？」

ついつい素でまたツツコミをした。

母さんの行動パターンと言動パターンがピッタリの中する確率って天文学的確率じゃね？宝くじ一等を当てる方が楽な気がする・・・
まあ、俺は黄金律で一等をフィーバーするけどね！おかげで上条家

の口座が一気に二桁上がったけどね！

・・・さて。いい加減に当麻を止めよう。親父、死ぬかもしれんな。

右手に触れないように（・・・・・・・・・・）当麻を抱えて引き剥がすと母さんの隣に座らせた。

この頃から当麻の代名詞と呼べる『幻想殺し（イマジンプレイカー）』が右手に宿っている。

生まれた頃から『幻想殺し（イマジンプレイカー）』があるせいか、当麻はかなり不幸なトラブルに巻き込まれているのだ。

本作でも『幻想殺し（イマジンプレイカー）』の詳細はよくわからず、二次小説でもよく転生者が使うが・・・当麻のはヤバイ。

「にいちちゃん？」

「フランクフルトやるから黙ろうな」

「わーい！」

当麻の『幻想殺し（イマジンプレイカー）』はオリジナル、“あらゆる異能を打ち消す”右手なので神様の奇跡も神様の祝福も消すのだ。

だからLUKは最低レベルなのだ。

俺の聖人としての、“聖なる右”の、“邪なる左”の魔力を打ち消すもんだから修行用に掛けている魔術をも消すもんだからせっかく掛けた魔力負荷枷も消されるのだ。

作るのにも苦勞するからなあ・・・当麻には悪いが右手にだけは触れらんねえ・・・

「にいちちゃん、フランクフルトまだあるよ」

「ん。いただくわ」

「あらあら・・・ケチャップもいるかしら？マヨネーズやカラシ、わさびも・・・」

「なぜわさび！？母さん、なんでわさびが選択肢に出るの！？」

母さんがバスケットからケチャップとマヨネーズ、カラシにわさびの容れ物を出してきた。

・・・もう母さんがわからない・・・

げんなりしながらケチャップとマスタードをフランクフルトにかけて食べてると親父が腹と股間を押さえながら起き上がってきた。冷や汗ダラダラ流して起き上がる親父を見ると親父の鑑を思い知った。

親父は子に父の威厳を見せるときは輝くんだな・・・よく理解したわ。

「というか父さん大丈夫？やっというてなんだが痛いだろ」

「・・・ふっ・・・翔麻、覚えておきなさい・・・」

親父はいまだに腹と股間を押さえながら少しだけ体を起こす。
それから洪すぎる顔で俺と当麻を見て・・・

「それが・・・父親なんだよ！」

「キシヨイ」

「おとうさん、きもちわるい」

俺と当麻のダブルパンチで親父は今度こそ完全にノックアウトした。
ずずーんと落ち込んだ親父はブツブツと延々に呟きながらこの世の
終わりみたいな顔していた。

取り敢えず俺と当麻と母さんは無視しておやつ用の母さん特製クッキーを食べることにした。

・・・は？親父？完全放置してますがなにか？キノコ量産してますがなにか？

うむ。気分転換にはなったから良しとしよう。

母さんに頬擦りされながらクッキーを頬張ることに集中する俺だった・・・

2（後書き）

幻想殺し（イマジンブレイカー）ってなんでしょうね？詳しく知ってる方はいるのでしょうか・・・

次回は時間が飛ぶかもです。

3 (前書き)

・・・なぜ、こうなった・・・？

「・・・翔麻、なんだそれは？」

「拾った」

「・・・いやいや。兄貴、それはないと思うぜ？」

現在、我らが上条家は全員がリビングに集まってテーブルに乗る黄色の物体をガン見している。

ビクニック
親父股間破壊事件から時が過ぎて当麻と俺は六歳になった。

時が飛んだのは特に話すことがないからだ。

あったとすれば当麻が妙に大人びたことだろうか。こんな濃ゆいキヤラしかない上条家の環境のせいだから仕方ないかな？

後、俺は親父を“父さん”から“親父”と呼ぶことにした。

親父はかなりシヨックを受けて鬼気迫る表情で掴み掛かれたんだが・・・まあ、親父の仕事仲間を出してなんとか事なきを得たがな。
イケニエ

「あらあら。可愛い狐さんね」

「こーん・・・」

「というか兄貴、狐なんかよく見つけたな・・・相変わらず運がいいから羨ましいよ・・・」

「散歩してたらなついた。山の中でうろろしてたから・・・かな？」

「なんで曖昧？」

まあ、わかるやつもいるが・・・この狐、藍しゃまだ。

魔力負荷の枷を掛け続けていたら魔力がかなり上がってやっと“式神使役”が可能になったわけだ。

ちなみにだが今の俺の魔力は普通の魔術師の十人分はある。

だがまだまだ上がるだろうな・・・“聖なる右”と“邪なる左”に加えて俺、聖人だし。

さらには当麻は前よりもトラブルに巻き込まれやすくなった。

交通事故になりかけるのはデフォになってる上に当麻にピンポイントでファミレスの料理がぶちまけられたり・・・当麻、碌な目に遭わんな。

それと同じくらい親父とフラグを建てまくってる。

当麻はお人好しだから人助けをよくする。それできゅん・・・ってくる乙女たちが多数多数。

「飼っていい？」

「こん！？（翔麻様！？私はペット扱いですか！？）」

黙れ。妖怪でなおかつ美女だから・・・とか言ったら親父が混乱するだろうが。

当麻も変態クソ兄貴・・・とか言い出すだろうがよ。言われたら殴

るけどね。

ああ・・・ちなみに藍しゃまとの出会いはこんな感じ。

——回想・・・二時間前——

「うつし。六年の魔力負荷でかなり魔力量は増えた・・・藍しやまを召還じゃあああああああい！！」

学校の帰りに近くの山にて俺は叫んでいた。

今まで意識が覚醒してから自分の中の魔力を操って負荷を掛け続けて六年！ついに藍しやまを召還する魔力に達したのだ！！

藍しやまを召還するには魔術師四人分の魔力、現界させるには六人分の魔力が必要なため、やっとやっとやっとやっとそれが出来たのだ！

まだ発展途上だが普通の魔術師が子供の時より百倍以上の魔力があるため、操るのにも時間がかかったため、一年ズレたのだが・・・まあ、いいや。

「藍しやまああああああ！！カマアアアアアアアン！！」

ペカ――！！

詠唱もへったくれないような叫びをすると目の前に陰陽師が使いそうな文字が現れ、円を描いた。

それに魔力が吸われる気配がするとジジジ・・・と嫌な感じがしてきた。

・・・あれ？失敗か？

するとボフン！と音がして中からこんな声が・・・！

「サーヴァントキャスター、呼び掛けに応じて参上した・・・と」
「ネタはいいから。どんだけノリがいいんだ？」あ、あれ？紫様はこ
うすればウケると・・・？」

グダグダだった。なんか運命ネタで藍しやまが現れると戸惑った顔
をしながらリトルボディの俺を見下ろした。

藍しやま・・・スキマババアに騙されてるよそれ・・・ん？紫様に
言われた（・・・・・・・・・・）？

「あーあー、聞いていい？」

「あ、はい。翔麻様」

「・・・取り敢えずヤバそうな呼び方は後で聞くとして・・・紫様
に言われた？」

「ええ。紫様が貴方を世話するようにと・・・あ！紫様からお手紙
を預かっています。どうぞ」

・・・なんでだろう。手紙を開くだけなのにガタガタと震えが止ま
らない上に冷や汗がダラダラ出てくるんだが・・・
藍しやまもなんか？を頭に浮かべて固まる俺を見てるし。
ええい！見てやるよお！！

ペラッ・・・

——はじめまして・・・かしら？

知ってるかもしれないけど八雲 紫、幻想郷の賢者と呼ばれるスキマ妖怪よ。

今回はよくも私の藍を式神として使役してくれたわね・・・アザゼルの頼みだから聞いたけど許さないわ。

しばし、藍を式神として貸してあげるけど覚悟しなさい。近々、そちらに行つて貴方を殺して（・・・）藍を取り返し、奴隷にしてあげるわ・・・

うふふ・・・束の間の天国を楽しみなさい・・・？

八雲 紫——

・・・ウソオオオオオオオオオオ！？紫様に狙われてるの俺！？しかもおねーさんの名前つてアザゼルって言つんだ！あの有名な“神の如き強者”のアザゼル様ですか！？

「あ、あの翔麻様？なぜそんなに汗を流しておられるのですか・・・？」

「オワタ。俺オワタ。死んだ。欲望に身を任せるとこうなるのか・・・アハハハ・・・」

「え？ちよつと翔麻様！？どうしたのですか！？」

藍しゃま・・・いや、藍が声を掛けてきたが俺は事態を理解すると目の前が真っ暗になった。

「え、ええ！？翔麻様ア！？なんで白目剥いて倒れるのですか！ちよつと！ちよつとおおおおおお！ー！」

——そして時はまた戻る・・・——

「・・・俺、死んだよね？」

「いきなりなに言い出すんだ兄貴！？」

「こーん！（だ、大丈夫ですよ！紫様もさすがには・・・ねえ？）」

不安すぎるよ藍さん・・・もうビビりにビビって藍しゃまなんて言えねーよ。

藍さんを召還した後に気絶した俺を藍さんが看病してくれて目を覚ましたら藍さんが狐形態（尻尾は一本）になり、上条家に連れ帰ったわけだ。

で、玄関にいた当麻に見られて家族会議・・・みたいな流れになったのだ。

正直、もう人生オワタと思う。チート妖怪のスキマババアに目をつけられたんじゃ死んだも当然だろ。

「むう・・・仕方がない！翔麻、きちんと世話をするなら飼っていいぞー！」

「・・・うん。ありがとう親父」

「くうーん（もうペットですか・・・少し、嫌ですね）」

「・・・翔麻。もうパパとは呼んでは「言つてねーし。親父、キモいぞ」・・・なぜだ・・・どこで育て方を間違えたんだ・・・？」

親父、最初からだよ。事あるごとに抱きついたり髭を擦り付けたら嫌われるからね？

当麻なんかフラグを建てまくる親父をかなり軽蔑してるからな？

もう上条家の順位は決まってるな・・・

[illegible]

みたいになってるわ。

親父、低いのはあなたのフラグ建築士体質のせいです。むやみやたらに女性に声を掛けないようにしましょう。（通信簿風に）

「ところで翔麻さん？名前は決めてるのかしら？」

「ん？藍って名前を付けるけど……どうかした？」

「あらあら。残念ね・・・母さん、
“ミーク”って名前を付けよう
としたんだけど・・・」

いや。母さん、ネコじゃないんだからさ。

ほら。藍さんもなんか嫌そうな顔してるし。

残念そうにする母さん、ブツブツ頂垂れる親父、リビングに置いてあつた鞆ランドセルを持って二階に上がった当麻。
それらを見てから藍さんを優しく抱き上げて自分の部屋に入った。
ランドセルを床に投げて藍さんをベッドの上に乗せると社長椅子（親父のオトモダチから戴きました。感謝感謝。）に座って頭を抱える。

「どうすりゃいいんだ・・・スキマババアは完全に俺を目の敵にしてやがるし・・・」

「スキマ・・・ババア・・・紫様が怒り狂いますね・・・翔麻様、取り敢えず私は何を？」

「んん？ああ・・・別に何もしなくてもいいですよ。したらスキマババアに殺られますから・・・はあ・・・」

ため息をつくとき藍さんがどうすれば・・・とおろおろしていたが今の俺には気付かない。

おそらくはあるワールドのフィアンマ死亡フラグよりまやばい死亡フラグを建ててしまったのだから。

その後、藍さんと話し合つて呼び捨てにすることにした。
さらに出会いの記念ということで藍の尻尾をモフモフさせてもらった。

人間形態だから九本の尻尾をモフモフ・・・すぐに寝てしまう俺だった。

「うう・・・つい勢いでやらせてしまったが・・・翔麻様は上手すぎて・・・不味いな・・・」

寝ていた俺は藍が股を濡らして悶えていたことを知らなかった・・・そして幻想郷の賢者共々、貞操を狙われることすらも・・・

3（後書き）

なぜかスキマババア登場。

もう思いきって八雲一同出します。翔麻、喰われます。

紫に藍に橙を出すか・・・

「（翔麻様、何をしておられるのですか？）」

「んー、まあ、能力の確認・・・かな？」

俺こと上条　翔麻が藍と出会って（拾って？）はたまた時間が過ぎた。

藍を召還した影響か、魔力がかなり増大していた。

藍を召還する前を1とすると20くらいまで上がっていた。

能力の確認には“聖なる右”“邪なる左”“聖人”のスペックと弱点についてを調べることにした。

まずは“聖なる右”。魔力が増えたおかげか、具現化しても魔力負荷による肉体損傷は無くなっていた。

しかし、原作のフィアンマと同様に空中分解が起きやすく、使えたものじゃなかった・・・が。

何かが可笑しいのにも気が付いた。

「安定しないと言うよりも何かが足りないような・・・？」

なんかこう・・・電池が足りなくなつた懐中電灯みたいに薄くなる感じがあるんだが・・・聖なる右ってこんなんだっけ？

フィアンマさんは世界に散らばるあらゆる魔術に関わる禁書レベル

の代物を集め、ミーシャ・クロイツェフの天使、インデックスの十万三千冊の禁書、当麻の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』を使って神上になり、聖なる右が安定してるんだよね？原作じゃすぐに当麻にぶん殴られたけど。

「ああ・・・消えちゃった・・・」

「翔麻様、おそらく魔力が何か足りないのでは？」

「・・・え？」

魔力が足りないのもあるけどもうひとつ重要な因子ファクターがあつたわ。

『天使の力』テレスマ

たぶんこれが無いから聖なる右が安定しないんじゃないかねえのか？
・・・どちらにせよ、天使にはなりたかねえわ。人間、やめるつもりはないし。

聖なる右、邪なる左、聖人の力を持つ時点で人外です。

「翔麻様、貴方が聖人ならば『ステイグマ聖痕』があるのでは？紫様は見たことがある。とおっしゃっていましたが・・・」

「『ステイグマ聖痕』、ねえ・・・」

・・・嫌なこと思い出した。聖人と言えば対聖人最終兵器、“聖人殺し”があつたな・・・

あのグラマーなおねーちゃんとは関わらないようにしよう。うん。

取り敢えず聖なる右は理解できたから次に行こうか。

「・・・めっちゃこええ・・・」

「・・・そうですね。私も少し寒気が・・・」

次は邪なる左を調べるんだが・・・なんか早く出せ出せ出せ出せと左肩辺りにユラユラと黒い靄が出てきてるんだが・・・キモい。

ガタガタ震える左肩というか左腕を抑えながら魔力を練り始める。

・・・あれ？これ、あれじゃね？

「やめろ！これ以上したら俺の邪眼が目覚める！」

「ふははははは！ようやく目覚めたぞ！」

的な厨二のお決まりのじゃね？

・・・イタイ。イタすぎる。俺って厨二病が発症したのか？

「うぬがあああああああああ！？」

「ちょ、翔麻様！？なぜ頭を地面に・・・ああ！血が！血が出てますよお止めください！」

「うぬおあああああああああ!？」

なんかムズ痒くなつて藍と来ていた裏山の地面に頭をガンガン叩きつけてゴロゴロと地面を転がりまくった。

藍は止めようと必死に羽交い締めするが、大きなお胸が当たるのでやめて。

落ち着いたら藍の陰陽道の術で止血してもらつて包帯を巻かれた。藍はもうやめてくださいよ?とめっ!って俺の額を指で押した。

・・・なんか、萌えた。

「んじゃ・・・カマアアアアアアアアン!!邪なる左イイイイイイッ!!!」

ピシャ——ン!!

雷が俺にピンポイントに命中した。

「あびばばばばばばばばばばっ!」

「翔麻様アアアアアアア!？」

雷に打たれて痺れながら叫ぶ俺を見て藍が叫んだ。

予想しなかった。というか出来なかった。だってそうだろ？邪なる左を発動させたら雷に打たれるって吉。でもないぜ？

最近出た辻林都子は受ける。

「あびやばばばばばばあ！？」

「え？ちょ、翔麻様ア！？なんで雷に・・・って翔麻様アアアアアアア！？」

にえあああああああ・・・ってあれ？どこかでこんな感じの変身っぽいのを見た気が・・・？

雷に打たれる俺はウンウン唸りながら記憶を引っ張り出して検索をしている。

え？雷？慣れたけど？というか落ちたときだけで今は帯電してるよ
うなもんだけど？

「し、し、し、翔麻様・・・それ・・・！」

「ん？」

藍がプルプル震えている手の指で俺の顔の左を指していた。
つられて顔を左に向けるように振り返り・・・固まった。

「な、な、な、な！・・・なんじゃこりやアアアアアアア！？」

そこにあつたのは腕。聖なる右のように空中分解しながらも腕が左肩から生えていた。

・・・ってこれは・・・！

「なんでネロさんんんんんんんんんんんん！？」

「な、なんという・・・禍々しい魔力だ・・・これではブチ切れた紫様が赤ん坊に見えるぞ・・・？」

「といつかなんでネロ！？そこは右腕だろ！？『デビルプリンガー悪魔の右腕』じゃねえんかいアザゼルうううううう！？」

見た目はあれ。デビメイの黒猫さんの悪魔の右腕みたいなの。
真っ黒で聖なる右の龍のような腕とはまた違うまさに悪魔の腕とも言えるモノが左肩から生えている。

・・・めっちゃ寒気がする。スキマババアの手紙を読んだ後よりも
すげー寒気がするよ・・・

「・・・ん？」

「翔麻様？」

「いや・・・なんだこれは？」

ディアプロ・イクシオ・アザゼリア
―邪なる左―

現在、使用不可。

能力

・絶対領域（50？限定）

・？？？

・？？？

・？？？

・？？？

・？？？

・・・なんやねんこれ・・・使えねーし。

絶対領域はいわばその範囲だけはあらゆる攻撃を防げたりできるみたいだな・・・

有効範囲は50？、クズにもほどがあるな。

「・・・使えねー」

「し、翔麻様？なぜため息を？」

「いや・・・邪なる左って約立たずみたい。だってさあ・・・使える能力はひとつしかないし、範囲も狭すぎるし・・・」

「・・・あ！紫様から指示があったのを忘れていました！」

「え？」

藍は裾に手を入れてゴソゴソと動かすと中から丸められた羊皮紙が出てきた。

それを藍から受け取ると中を開いて読んでみる。

——これを読んだということは“邪なる左”ディアプロ・イクシオ・アザゼリアを調べているでしょう。

それはまだ不完全ですが、世界に散らばる霊装を探し出し、それを“邪なる左”ディアプロ・イクシオ・アザゼリアで触れなさい。そうすれば空白の能力が解放されるわ。あ、あと絶対領域は0.5秒しか使えないから気を付けてね？絶対領域は強化される度に進化するから。頑張つてね♪

“神の如き強者”アザゼル

追伸

あ、ちなみに“邪なる左”ディアプロ・イクシオ・アザゼリアは私の力の一部よ——

・・・マジですかいな・・・

「二枚目が・・・ここに回収する霊装が・・・なにになに？」

「どれどれ？」

——回収霊装一覧——

・閻魔刀

・法の書

クローチェディビエトロ

・使徒十字

・ブリューナクの種^{シード}

・カーテナ^{II}オリジナル

「・・・なめてんのかあのクソ神様・・・」

「あ、あはは・・・」

なんなのこれ？全部っていうか、ほとんどがとあるワールドの重要な霊装じゃねえか・・・
カーテナ^{II}オリジナルなんかどないせえ言っねん。あの女王にドS王女様と戦えってか？

「ブリューナクって・・・閻魔刀なんかネロさんやん」

「あ、閻魔刀なら紫様が持っていましたよ？外の世界を散歩したら見つけたわ」とか言っていました」

「死んだアアアアアアア！ゆかりんが持つてるなら雑魚の俺にどないせえ言っんやああああああ！！」

頭を抱えて絶叫した。

あのチート妖怪のスキマババアからどうやってもらえって言っんだ？

「閻魔刀ください」

「却下よ」死になさい」

「アッ———！！」

つてなるわ！

「あ、まだあるみたいですよ・・・霊装なら取り込めば強化されるからね」だそうですよ？」

「キタ！これなら集めて進化すればあるいは・・・マジでキタ！これで勝つる！」

「無理ですよ？紫様はオリジナルのアザゼル様と互角に渡り合いますから」

「神は死んだッ！！」

こんな感じで藍と裏山にもらったチート特典を確認した。

取り敢えず全てが未完成であり、発展途上だということがわかった。

藍からの提案でさらなるパワーアップのために藍による魔力負荷、肉体重力負荷などの枷を作ってもらった。

見た目は耳飾りみたいな感じで蒼色の石がついたものである。

まあ・・・母さんに聞かれたが、ほっぺにちゅーで許してもらった。親父が射殺するような目で見てたのは痛かったが。

「・・・ZZZ・・・」

「あ、ああ・・・ダメ・・・！イク・・・！」

その日の夜、また藍の尻尾をモフモフしながら寝た。
次の日の朝にピクピクした藍を見て不思議に思ったのは余談である。

4（後書き）

ルビは適当www

書いてたらゆかりんのフラグがどんどん建つな・・・コワイ。

閻魔刀とかは完全にノリ。邪なる左の見た目から決めた。

5（前書き）

なぜこうなった？としか言えない。

「やーい
やーい
疫病神
〜！」

「お前がいたらみんな不幸になるって父ちゃん言ってたぜ！」

とある校庭では一人の少年が虐められていた。

ただ、不幸に・・・トラブルに巻き込まれるからといって。虐めている一人が水が入ったバケツを少年に掛けようとする・・・

「ぶるあああああああ！」

「げ！やべ、魔神だ！逃げ……ぎやぷろお！？」

そこにバケツを持った少年が消えると一人の少年が現れる。

「てめえええええらあああああ！俺の弟を虐めやがつてえええええええ！」

俺は虐めていたクソガキを殴り飛ばしたり、蹴り飛ばしたり、タマを潰したり・・・とにかく暴れてトラウマを埋めつけた。

何回も何回も当麻を虐めやがって・・・当麻がためえらに何かした

のか!?

ここ（小学校）に来てからしばらく経つと当麻はいつものごとく、トラブルに巻き込まれ、近付くとトラブルに巻き込まれると心無い親が言いやがったからイジメなんて生温い仕打ちを受けている。甘かった・・・！当麻が昔に虐められていたのは描かれていたがまさかここまで酷いとはな・・・！

「うわ——ん！痛いよ——！」

「黙れ！！当麻はもつと痛いんだ馬鹿野郎があ！反省しやがれ！」

「上条！貴様何をしている!？」

教師が来るまで俺はそいつらを殴りまくっていたのだった。

教師が全力で抑えても聖人である俺には障害にはならず、生徒に注意しない教師、一緒になってイジメをする教師も殴った。

これが最近の日常。俺は当麻をただ不幸だからという理由で虐めるクズを相手に暴れている。

「くっ・・・上条、貴様・・・」

「チツ、イジメを解決しないような奴は教師を名乗る資格はねえ・・・
・教育委員会に報告をさせてもらっぞ。証拠ならあるからなあ・・・」

倒れる教師を傍目にボロボロの当麻の血を拭いてやると放り投げられていたランドセルを当麻の分も持って背負い、睨みながらその場を去った。

まあ、藍に頼んでクソガキのイジメの現場、影ながら当麻を殴る教師が映った映像を撮ってもらった。

「・・・翔麻・・・ごめん・・・」

「当麻、お前は悪くない。ただ運が悪いだけ（・・・・・・・・）・・・俺だけでもお前の味方だよ。親父も母さんもな」

「ごめんね・・・」

「謝るな」

静かに泣く当麻を背負いながら歩いていると家に着いた。
残念ながら両手が塞がっているのでドアは足で器用に開けた。

「ただいま」

「あらあら翔麻さん、当麻さ・・・あらあら！大変ね！」

「うげ」

小さい声でただいまを言うと出掛けてるはずの母さんがリビングか

ら玄関まで来ていた。

あ、やべ・・・今までは心配させないようにしたのに・・・

母さんは当麻をペタペタと触りまくって心配していた。
いや、母さん・・・当麻が痛そうだからやめたげて。

「母さん、この事は親父も知ってるから。俺は当麻を手当てするか
ら聞いといてくれない？」

「・・・あらあら・・・刀夜さんも知ってるのね・・・？」

「（・・・翔麻、父さん死ぬんじゃないね？）」「

「（墓には親父の好きな酒を置いてやろう）」「

「（死ぬ前提じゃねえか！）」「

ブラックオーラを纏う母さんを見なかったことにして当麻を俺の部屋に入れた。

ランドセルをポイと投げるとクローゼットから救急箱を取り出す。

「と、当麻！？またやられたのか！？」

「藍、すまないが手伝ってくれ」

「すみません。藍さん・・・」

そこに外出していた藍が窓から帰ってきた。

ちなみに当麻には藍が玉藻前だということはバレている。

前に藍が幻術を掛けて俺と散歩に行く際に当麻の『幻想殺し（イマジンプレイカー）』のせいかな、幻術が効かないため、藍がバレたわけ。

・・・当麻のやつ、藍の胸見て顔そらしていな。初心^{ウツ}よのお・・・
フオフオフオ！

「・・・うん。よし・・・今日は風呂には浸かるな。体を軽く拭くだけにしろ・・・滲みて痛いぞ？」

「ああ。ありがとう翔麻・・・」

「気にすんな」

当麻も双子だからということであれを呼び捨てにさせている。

んー、前世に家が診療所だったから包帯の巻き方とか手当てが慣れてるんだが・・・いいか。

「・・・翔麻、まさか今の・・・」

「・・・さあ、ゲームだゲーム」

「現実逃避するな！」

終わってペシと頭を叩くと下から絶叫が響いた・・・うん。聞いてないよ？母さん！？僕が何を・・・むぎゃあああああ！！ってのは聞いてないぞ？

「聞いてるじゃねえか！」

「なら止める？母さんが修羅モードだから殺されはしないが死ぬるぞ？」

「・・・何やる？モ○ハン？」

当麻も逃げたようだ。

まあ、母さんが修羅モードになるってのは上条家最強最悪の化け物を目覚めさせるのと同じだから・・・親父には生け贄になってもらおう。

親父の叫びを無視して藍に膝に寄せられながらゲームをすることにした。

「・・・というか翔麻？なんで藍さんの膝に乗ってるわけ？」

「よく見る。寄せられてる（・・・・・・・・）んだよバカ」

「おお・・・やはり人間の子供はスベスベで柔らかい・・・」

「（・・・関わらないように。わかったか？（当麻／翔麻）？）」

「

藍がなんかヤバイ気配を放つが無視してゲームを楽しむことにした。俺は藍に膝に乗せられてクンカクンカ匂いを嗅がれながら頬擦りされてる。

・ ・ ・ 確定だ。俺も親父の魔性の魅力（フラグ体質）持ってるな ・ ・ ・ 認めたくなかった。

あ。聖なる右も発動できるくらいに『天使の力』も貯まってきた。テレズマというか聖人だからかむやみやたらに貯まるんだよな ・ ・ ・ 俺はアツクア以上にバケモンか。

少しずつ体も鍛えている。藍は長い間を生きているおかげか、あらゆる技術を持っているから色々教えてもらっている。

弾幕、太極拳、テコンドー、CQCなどなど。弾幕は余計だよ。特にCQCはいいね。蛇男さん直伝らしいから使いやすい。

「うらあああああ！しょおおおりゅううけええええん！！」

「なんのおおおおおお！！」

「~~~~~」

カチャカチャとコントローラーを鳴らしながら当麻とバトる。

地味に操作する相手に蹴りを加えたり目隠ししたりとフェアもクソもなかった。

藍は俺を抱きながら鼻歌歌ってるし。

「喰らえや！禁断のハメ技コンボオオオオオ！！」

「ぐあっ！？それは卑怯だぞ翔麻ア！」

コントローラーが壊れるくらいに連打すると俺のキャラが打ち上げ
↓空中サマーソルト↓空中コンボ↓踵落とし↓必殺技で踏み殺す。
我ながらやりすぎだな・・・

「っしゃああああ！今日のエビフライゲットだべ――

――！！」

「くそっ！翔麻反則すぎる！」

・・・うんうん。当麻も気は紛れたから良し。かな？
取り敢えず当麻のエビフライ、旨かったです。

+
-
-
+
-
-
+
-
-
+
-
-
+
-
-
+
-
-
+

「・・・行こうか」

「はい翔麻様」

その日の夜、俺と藍は家から抜け出してとある場所に向かう。
藍が撮った証拠の映像を教育委員会に届けるために。

「・・・ククツ、悪いね。当麻をあそこまでして許せないんでな」

「翔麻様・・・」

「ん？終わったか？」

「はい。マスコミにも渡しましたから握り潰すのは無理ですね。帰りましょう」

「はいよ」

ただム力つくから殴ったというクソ教師を半殺しにすると何事もなかったかのように家に帰った。

最近になってわかったんだがどうやら俺は壊れてるみたいだな。人を傷付けても罪悪感も何もないからな・・・

「・・・せめて・・・当麻だけは光の道を歩ませたいな・・・」

「翔麻様？」

「・・・いや、なんでもないよ」

その日からか。俺が当麻とは違う闇の道を歩み始めたのは・・・もう、当麻とは相容れない存在になりつつあるな・・・

5（後書き）

あ、翔麻は別に敵になりませんよ？

ただ単に邪なる左の強化フラグです。

6（前書き）

事態は急展開！！

「げぼっげぼっ・・・チツ、油断したな・・・」

「翔麻！翔麻！」

「翔麻様！しっかりしてください翔麻様！」

俺は血の流れる腹を押さえながらコンクリートの地面に横たわっている。

痛みに血を吐きながら流れる血を必死で押さえる藍と泣きながら揺さぶる当麻を霞む視界で他人事のように眺めていた。

藍は今まで見たことがないくらい真っ青になりながら白い布を真っ赤に染めながらも押さえていた。

「・・・がふっ！」

「！？翔麻様！」

口に貯まった血を吐き出すと薄れていく意識を必死に留める。

痛みを堪えながら魔力を操って傷口を塞ごうとするが、背中を少し治すだけが限界だった。

「・・・くそ・・・目が霞む・・・」

「翔麻！翔麻ア！」

「くっ！まだ救急車は来ないのか！」

「・・・当麻・・・藍・・・母さん・・・親父・・・すまん・・・」

急激に薄れていく意識を留められずにそのまま闇に沈んでいった。
藍と当麻が必死に呼び掛ける声が嫌に遠くに感じた――

+
-
-
+
-
-
+
-
-
+
-
-
+
-
-
+
-
-
+

「・・・翔麻・・・なんで・・・！」

とある病院にて上条 翔麻は包帯で巻かれたまま、死んだように眠り、側には彼の家族である刀夜、詩菜、当麻が横たわる翔麻を呆然と見ており、当麻は泣きながら詩菜にしがみついていた。

刀夜はなぜこうなったかと怒りに震え、詩菜は泣く当麻を慰めながら抱き締めていた。

「上条君の命に別状はありません。傷は残りますが後遺症らしいものはないはずです」

「先生・・・翔麻はなぜ・・・？」

「・・・左脇腹と背中にナイフの刺し傷がありました。正直、もう少し深かったら・・・」

「・・・そう、ですか・・・」

「今は絶対安静です。麻酔もありますし、目覚めるのは早くて四日でしょう」

そう言つと医者らしき青年は部屋から出ていった。
静かになつた病室にて心電図の音だけが響く。

「翔麻、翔麻・・・俺が・・・俺が不幸なのが悪かつたんだ・・・」

「当麻・・・一体何があつたんだ？」

「・・・」

ポツリポツリと当麻は泣きながらも静かに語り出した。

「今日の飯は何かね？当麻、なんだと思う？」

「んー、俺は餃子かな？少しズラしたら鍋か何かじゃないか？」

「私はいなり寿司ですね」

「・・・藍、さすがにないわ」

「なっ！いなり寿司がないとは、私に死ねと！？翔麻様、酷い！」

俺達は学校の帰りに迎えに来てくれた藍さんと翔麻と一緒に通学路を逆に歩いていたんだ。

「でもまあ・・・また買ってあげるから」

「・・・！」

うわぁ・・・藍さんの目がキラキラ光ってるな。藍さん、いなり寿司とかきつねうどんが好きだからな・・・
あ。また翔麻が金拾って・・・諭吉さんか！

「・・・ネコババするか（ボソツ）」

駄目だ！翔麻、頼むからお巡りさんところに届けて！
それにお前、金に困ってないだろ！前に拾った宝くじで一等当てたの知ってるんだぞ！？

「当麻、口止め料だ」

「ふっふっふ・・・お主も悪よのお・・・」

「いえいえ。お代官様ほどでは・・・ってやめろ。小学生ガキがこんなことしてたらヤバイだろ」

「それに翔麻様がやると悪人にしか見えませんしね」

「よし。藍、飯抜き。いなり寿司はお預けだ」

ピシャーン！と藍さんの後ろに稲妻が見えると涙目になって翔麻の顔を豊満な胸に埋めさせながらなぜ！？と言いたげな目を翔麻に向けた。

いや、藍さん・・・翔麻窒息しかけてるからやめたげ・・・

「もがががが——！？」

「翔麻様！いなり寿司を！いなり寿司をくださいいいいい！！」

・・・よし見てないぜ？翔麻の手が藍さんの胸にズブズブ食い込むのは・・・

取り敢えず目をそらして歩いておいた。

30分くらいすると翔麻が折れて藍さんにいなり寿司を二週間分買うことで手を打ったみたいだ。

というか翔麻？どんだけ金があるん？母さん達にもかなり渡したろ？

「いくらだっけ？」

「さあ？前に調べたら15368790円でしたよ？」

「どんだけあるんだよ！？翔麻、お前の金運分けてください！」

「やだ」

翔麻にバツサリ斬られて頂垂れていると翔麻と藍さんが何かを言い合っていた。

精通がゝとか奉仕をゝとか言っていたがなんなんだ？

しばらく歩いて人気の無い場所に来ると翔麻の顔が陰しくなつて藍さんに何か指示を出していた。
藍さんが隣に來ると前を向いたまま、静かだがはっきりと聞こえる声で言つてきた。

「当麻、少し警戒するんだ。嫌な予感がする」

「え？藍さん・・・？」

「藍！！」

翔麻が叫ぶと何処からかナイフを持った人達が現れ、俺達の邪魔をしていた。

翔麻はそれを見た瞬間に駆け出し、近くの中年男性を蹴り飛ばした。

「当麻を連れていけ！ここは俺がやる！」

「死ねえええええ！！疫病神が！！」

「邪魔だこのクズが！！」

俺に向かつて走つてきた青年を腹パンすると翔麻は藍さんにちよいちよいと指で家の方向を指してまた別の男性を殴った。
え？なんだよこれ・・・？

「チィ！当麻ア！邪魔だオラアアアアアアア！」

ブツブツとナイフを持った中年男性が近付くと無性に怖くなって逃げようとしたが足が動かなかった。

翔麻がそれを見て叫びながらこちらに走ってくるのが見えた。

「疫病神疫病神疫病神疫病神疫病神疫病神疫病神疫病神イイイイ！！」

「当麻アアアアアアア！！」

ドシュツ・・・

「え・・・？」

「し、翔麻様アアアアアアア！！」

「ひ、ひひひひひはははは！！」

「いてえ・・・！」

気が付いたら俺は翔麻に抱き付かれていた。
翔麻は辛そうに顔を歪めるがすぐに戻して背中に手を回すとズポッと何かが抜ける音がした。

カランカランとコンクリートの地面に落ちたのは血の付いたナイフだった。

・・・血の・・・付いた・・・？

「翔麻・・・？」

「邪魔くせんだよクソジジイがあー！！」

「けひひひ・・・げぼっ！？」

翔麻が背を向けるとそこが赤く染まった場所があり、血がダラダラと流れていた。

「翔麻様！翔麻様アアアアアアアア！！どっけええええええ！！」

「お前も・・・死んでしまえええええええ！！」

グサツ・・・

「がああああああああああ！！？」

「翔麻・・・！翔麻！翔麻アアアアアアアア！！」

背中を押さえてフラフラしていた翔麻を青年がナイフで腹を刺した

のが見え、飛び散った血が翔麻の目に入ったのも見えた。

叫ぶ翔麻を見て俺は近寄ろうとしたが遠くからサイレンが響き、ナイフを持った男性達は我先にと逃げ出した。

藍さんは今まで見たことがない顔で翔麻に近寄ると着く前に翔麻はコンクリートの地面に崩れ落ちた。

血がコンクリートを汚してるのを見ると藍さんの顔が真っ青になり、札を出したが止まり、代わりに白いハンカチを出して腹の傷を押さえた。

「翔麻様！翔麻様！」

「翔麻！翔麻ア！」

「早く！誰か救急車呼べよ！ヤバイぞあれ！」

「キヤアアアアア！」

「・・・そうか・・・」

当麻が話し終わると刀夜はプルプルと握り拳を震わせながら怒っていた。

詩菜はまた泣き出した当麻をあやししながら自分も泣くように二人で抱き合っていた。

「・・・失礼、します・・・」

「む？貴女は？」

そこに藍が人間形態で入ってきた。

刀夜は訝しげに藍を見るが当麻が説明をすると刀夜と詩菜は目を見開いて驚いた。

「貴女が・・・あの藍・・・？」

「はい。今まで隠して申し訳ございません。翔麻様に止められていましたから」

藍は全てを話した。自分が翔麻の式であること、翔麻を助けられなかったこと・・・全てを。

全てを話した藍を刀夜と詩菜は頭を下げて感謝をした。守れなかったわけではないと、今まで翔麻を支えてくれてありがとうと。

そこに翔麻に繋がれた心電図が煩く鳴ると医者や看護師さん達が慌ただしく入ってきた。

刀夜、詩菜、当麻、藍は病室を追い出され、慌ただしく動く医者達を呆然と見ていた。

「翔麻・・・！死なないでくれ・・・！」

「翔麻さん・・・」

「翔麻・・・翔麻・・・！翔麻！兄ちゃあああああん！！」

当麻の叫びは暗くなった病院に不気味なほど響き渡った。

6（後書き）

翔麻、死す・・・なわけありません。

スキマババア出すのにちょうどよかったから書いた。

原作でもナイフで刺された（包丁か？）場所ありましたし。

7（前書き）

ゆかりん、暴走。

藍しゃまもwww

「好きです。結婚して私と一緒に暮らしませんか？」

「・・・また返答に困るコメントだなあ、おい。藍、ほんまに本物かコイツ？」

「さ、さあ？」

「・・・ん？状況がわからない？なら少し時間を戻そうか・・・」
逆 キングクリム（ry

「・・・ん？」

目を覚ましたら知らない・・・言わねば！

「知らないてん」 「翔麻！？起きたのか！？」 最後まで言わせるよ
「！」

「母さん！母さん！翔麻が目を開けたぞ！」

「あらあら！翔麻さん！」

「翔麻アアアアアアア！」

「ぐげるぶあ！？」

名台詞を言おうとしたら親父に阻まれ、親父は叫びながら母さんを呼ぶ。

その母さんはあらあらと連発しながらガン見をする。
当麻は泣きながら傷をダイレクトに頭突きしてきた。

・・・なんてカオス？

閑話休題。

「・・・どうだい？翔麻くん、体の調子は？」

「はい。腹が減ってるのと少し体が動かしづらい以外は特には・・・」

「それは血が足りないのと動いていないからだね。ほかにはないかい？」

「・・・あの、これは・・・？」

しばらくすると親父が呼んだのか、爽やかイケメンの医者が入って

きて俺を問診しながら色々書いていた。
気になったのは右目。包帯が巻かれているのか、真っ暗で何も見えなかった。

ちよいちよいと指でつつくとイケメン医者は苦笑しながら鏡を見せ
てきた。

「・・・え？俺、右目も怪我したのか？」

「いや。君がお腹を刺された時に血が目に入っただろう？消毒をし
て包帯を巻いているだけさ。この包帯よりは取れるのは早いよ」

緑色の病人服を少しズラすと真っ白な包帯が体を完全に覆っていた。
マジでか。そんなに俺は重症だったのか？

「まずは背中だけどこれは比較的に傷は小さかった、傷は消えるよ」

「ってことは腹の傷はやバイってこと？」

「・・・君、本当に小学生？筋肉の付き方と言い、医学会を啞然と
させるよ・・・」

「よく、言われますから」

「・・・ま、まあね。お腹の傷は背中と比べてかなり大きい。残念
だけどこれは一生残るだろうね」

・・・背中にしか魔力回せなかったから仕方ないかな？
腹くらいなら服とかで隠せるからいいか。

それから軽く話をするといけメン医者からリンゴやメロンなどをた
かつ・・・げふんげふん！貰って食べることにした。

「いや！本当に良かったよ翔麻！父さんはお前が心配で心配で・・・」
「

「あー、すまん親父。心配かけたな」

病人用のベッドに上半身だけを起こして母さんが剥いてくれたリン
ゴをシャリシャリ食べながら泣く親父と話す。

母さんはニコニコしながらリンゴを・・・どんだけ剥くん母さん？

当麻は少し陰のある顔で俺と話してたからデコピンして気にするな
と言っておいた。

案の定、当麻は大泣きして抱きついてきた。ごめんと延々と謝りな
がら。

「あ、そうだ翔麻」

「なんだよ親父？」

「藍さんなんだがな、ゆかり？さんを連れてくると言っていたぞ？」

ガッシャ——ン！！

「・・・ゑ？」

「いやー！あんな美人さんにそこまでされるとは羨まし・・・いや、違うよ母さん！これは・・・！」

「あらあら。刀夜さんつたら・・・」

母さんが親父を掴んで病室から出ていったが、俺はそれどころではなかった。

紫が・・・来る・・・？

「し、翔麻！？なんでガタガタ震えてるんだ！？」

「\$*@¥\$ ▲#£¢!！」

「え？翔麻！ちょ！看護師さ——ん！！！」

閑話休題（TAKE：2とも言う）。

嘘だ！藍のやつ、スキマババアを呼ぶのか！？

マズイ！非常にマズイ！今の俺は手負いだ！こんなんじゃ戦うどころかスキマババアの式にされて奴隷化するのが見え見えだ！！

どうする！？考えろ上条 翔麻！

「ううううむ・・・ZZZ・・・」

取り敢えず思考を放棄して寝ることにした。

あれこれと考えて寝ていたらあつという間に三日が過ぎ、夜になっていた。

そして・・・奴が来る・・・！！

「・・・やべｗｗｗｗ気が付いたら夜とかｗｗｗｗ」

翔麻は深夜の妙なテンションになり、ハイになっているだけです。
出来たらトンカチを投げただけだと嬉しいです

「し、よ、う、ま、さ、まアアアアアア！！」

「がぶれ！？」

悶々と深夜になった病室のベッドで腕を組みながらウトウトしていると衝撃が腹を突き抜ける！
痛みに堪えながら下を見ると見慣れた帽子と金髪が目に入った。

「ら、らん・・・？」

「翔麻様翔麻様翔麻様翔麻様アア~~~~！！」

グリグリと腹の傷に頬擦りしていたのは藍だった。

いつものキヤラはどこに行ったのか、抱きついてスリスリしてくる藍に俺は戦慄を感じた。

キョロキョロと藍を引き剥がしながら辺りを見回してソレを探す。
そして視線を感じる場所というか藍に似た気配がある場所を見ると冷や汗がダラッダラ噴き出すのを感じた。

「（・・・やべえ・・・！このプレッシャー・・・ただ者では・・・
出たか！スキマババア！！）」

「紫さま！この方が翔麻様です！」

グバァッと空間に裂け目が出来ると体がピシりと固まり、動けなくなった。

「うふふふふふふふふふふふふ」

「ひい！？」

中からおぞましいほど怨念が籠った声が聞こえてくるとゆっくりと走馬灯が・・・

ああ・・・俺、死ぬんだ・・・出来たら死ぬ前に藍の胸に埋もれて寝たかった・・・
童貞も卒業したかった・・・親父、エロ本ありがとう・・・

「さあ！貴方の残りの人生、天国だったかしら！？よくも私の藍を玩んでくれたわね！覚悟はできてるかしら・・・？」

「・・・オワタわ」

「うふ、うふふ、うふふふふふふふふふふふ・・・！さて。
今から・・・あなた、を・・・」

出来た裂け目から南蛮服のような服を着た女性が出てきた。
女性は閉じられた扇子を持って出てくると目が笑っていない顔で俺を見ると・・・固まる。

「・・・・・・・・・？」

「・・・いい」

「・・・は？」

そのまま固まった女性がボソリと何かを呟くとしがみついている藍を無理矢理引き剥がしてそそくさと病室の隅に行った。

「（ら、藍！なにあの子！？あの子が貴方のなの！？）」

「（は、はい。あの方が上条 翔麻様、私のもう一人の主ですが・・・紫さま？）」「

「（そ、そう・・・まさか私をここまでときめかせるなんて・・・！何年、いや！初めてだわ！）」

「（ゆ、紫さま？どうしました？）」「

・・・何を話してるんだ？藍が紫さまと言ってるからあれがスキマババ・・・さーせん。八雲 紫か・・・

感じた殺気に訂正してジーツと何かを話す二人を見てみる。

・・・なにあれ？あれが幻想郷の賢者って呼ばれる大妖怪八雲 紫か？

藍から何かを聞くと頬を染めて涎を垂らしそうなくらい口を緩めたり、目を見開いて驚いたりしていた。

「（そ、それ本当？藍、そんなにいいの？）」

「（は、はい・・・正直、私とあろうものが股を濡らして・・・／＼／＼）」

・・・ヤヴァイ雰囲気とするな。アダルトなガールズトークしてやがる・・・

藍が股を擦り合わせながらもじもじする姿を見て頭に貞操危険！つて出るん・・・ん？紫がこちらに・・・まさか！俺を殺る気か！？

「好きです、結婚して私と一緒に暮らしませんか？」

—そして時はまた戻る—

「・・・え？そんなに時間が経っていたのか！？」

「はい。刀夜様も詩菜様も当麻も心配してましたよ？刀夜様なんかは・・・はい。私はナニモシリマセンヨ？」

・・・藍、知ってしまったのか。親父の裏の顔を・・・

親父、海外によく行ってフラグを建築しまくるからとんでもない繋がりがあるんだよね。

ハリウッドスターしかり、マフィアしかり、大会社の社長しかり・・・
親父エ・・・

「んー、だからか。体が動かしづらいわけだ。親父も話せばいいのにさ・・・あむっ」

「きゃー！可愛い！ほらほら！翔麻、これも食べなさい！」

「・・・俺のイメージが、崩れる・・・」

「あ、あははは・・・紫さま・・・」

藍によれば俺が刺されて二ヶ月が経ってるらしい。藍が紫に会いに行くのに三日、幻想郷で冬眠していた紫を起こすのに約一ヶ月、起こされてイライラした紫を止めるのにも時間がかかってやっとのこさ連れてきたら俺は起きてたと。

・・・藍、お疲れ様。いなり寿司いくらでも買ってやるから。

藍からさらに詳細を聞くと俺達を襲った奴等は会社にリストラされた奴ばかりみたいだった。

中には俺が教育委員会に提出したあれのせいでクビになった教師もいたらしい。

あんなにいたのにバレなかったのは近くに住む住民が見て見ぬフリをしたからだそうだ。

不幸だった当麻を疎ましく思ってたらしい・・・が、イラつくな。

「警察に逮捕されたのですが、見て見ぬフリをした住民達の立件は難しいそうです。本当に知らぬフリをしたのか、本当に知らなかったのか曖昧でしたから」

「・・・うわ・・・親父、キレるぞ」

「というかキレてますね。刀夜様は・・・いや、違いますね」

・・・怖い。自分の親父なのに得体の知れない奴だよ！

親父なら本気出せば世界すら動かせるんじゃないか！？

「……ありえる（ありえそうですね）」

「し、翔麻！あーんしてあーん！」

「……いや、お腹一杯だから……」

本当に八雲 紫なのか？さっきからお土産って幻想郷名物の幽々子饅頭（かなり人気らしい）をあーんしたりしてくるんだが……ほら。藍もなんか紫……さま……？バ力な……！って言うてるよ？

「……やはりあの攻撃はまずかったか……」

「え？なんかしたの？」

「あ、いや。紫さまを止めるために幻想郷の幽々子、レミリア、フランドール、咲夜、霊夢、魔理沙、勇義、萃香達にも力を借りたんですが……」

「なにその豪華な幻想郷オールスター！？」

「……（頭にそれを浮かべる……）」

「……うん。なんか紫が泣きながら逃げる姿が……いや。高笑いしながら幽々子さん達を追いかける姿がまざまざと浮かぶな。」

というかゆづかりんとか天魔とかは戦わなかったのだろうか？

「不眠不休で紫さまを止めるのに一ヶ月以上・・・うふふ・・・大変でしたね・・・」

「ら、藍！？どうしたんだ藍！しっかりしろ！自分を忘れるな！」

虚ろな目をしてブツブツ言い始めた藍を見てガクガクと肩を掴んで揺らしながら藍に呼び掛けるが、藍はあははと壊れたようだ。
藍！どうすれば・・・はっ！？

——翔麻様、もし私が可笑しくなったらほっぺにちゅーをお願いしますますね？

——・・・いや、やるのは母さんだけだからね？そんなに目をキラキラさせてもやらないからね？というかわきわきした手を引っ込める！！

・・・どうしようか。なんか頭にこの会話がよぎったんだが・・・

あはははと虚ろな目をした藍、次はどれを食べさせよう？とスキマを調べる紫と目が覚めた時よりかなり力オスな空間になっていた。

追伸：藍にほつぺにちゅーしたらハイになって終始ウザかった。
勢い余って喰われかけました。まる。

7（後書き）

次回から学園都市フラグ建設開始。

#8（前書き）

学園都市フラグ、着実に建築。というか建築済み。

8

「あらあら。美味しいですね」

「ふふ。こちらですよ」

「はっはっはっ！面白いですね。紫さん」

「いえいえ。お父様も中々ですよ？面白い話を持っていらっしゃいますわ」

「・・・おい翔麻」

「気にすんな。気にしちゃ駄目だ。気にしちゃ・・・駄目だ・・・
べ・・・あばばば」

「し、ししし翔麻あああ!？」

閑話休題（カアアット！NGシーン！）

・・・よし。整理をしよう。怪我が大体治って退院して・・・あ、そうだったな。

退院したら親父が母さんと退院パーティーを開いて豪華な夕食を食べて小学三年生なのに母さんと風呂に入って（強制）藍を紹介して久々の自分の部屋のベッドに藍をモフリながら寝て・・・

次の日の朝に藍に起こされて下のリビングに下りたらこうなったんだよな？

スキマ妖怪のゆかりんが親父と母さんと仲良く雑談をしていた・・・何してんだクソ親父。

「ほほほほ。貴方も冗談が面白いですわね」

「いやあ、あはははは・・・ぐぼお!？」

「（よくやった翔麻！父さんざまあみやがれ!）」

「・・・ウマウマ」

なんか鼻を伸ばす親父がムカついて朝に用意されたグレープフルーツをそのまま頭にぶつけて黙らせてた。

当麻がアイコンタクトで褒めると俺は何も知らない感じを装ってパクパクと焼けた食パンを食べる。

「それよりお母様、翔麻君は大丈夫なのですか？傷は塞がったようですが・・・」

「うふふ。傷と目以外は異常はありませんよ。少し見映えがあれですが……」

「……母さん、なんでその人と仲がいいわけ？まだ会って間もないだろ？」

なんか妙に仲がいい紫と母さんを見ていると紫が何かをしたのか気になるのだが……

「（何もしてないわよ？ただ貴方の事を話してたら仲良くなったみたいなの？）」

……どちらにせよめんどくさい事が起きそうだな。紫と母さんが組んだら幻想郷なんかメじゃないんじゃない？

そしてなぜだろう……将来に紫と母さんが俺を着せ替え人形にして遊ぶ姿がまざまざと浮かぶのは？

ま、ともかく。怪我はなおったからいいかな？

やはりイケメン医者様の言った通りに背中傷はうつすらと近くで見なければわからないくらい小さいが、腹の傷は大きく残ってしまった。

右脇腹を縦に走る大きな傷が。どうやら刺したバカは刺して斬り上げたか、斬り下げたかどちらかをしたのだろう。

こちらはいい。服で隠せるからな。だが、問題は右目だ。

包帯を取って鏡を見てみたら瞳の色が血と同じように鮮やかな深紅色をしていたのだ。

ビックリした俺は頬をつねる、ではなく果物ナイフを手首に当てようとしたため、イケメン医者様、看護師さん、親父に必死に止められた。

「・・・で、親父。カラコンはまだなのか？」

「ん？あと二日だと聞いたが・・・翔麻、やはり付けない方がいいんじゃないか？」

「・・・親父。こんな厨二の塊であるオッドアイは忌み嫌われるものだよ。息子が痛い厨二中学生みたいに言われていいのか？」

「かまわ「死ねクソ親父イツ！！」ぎゃべらばっ！」

左目が日本人特有・・・いや、俺は漆黒に近い黒で右目が血のような深紅色と厨二の集大成のオッドアイになっている。

なんか厨二ってあだ名が付くのが嫌だから親父に頼んで左目と同じ漆黒のカラコンタクトを作るように頼んだ。

なのに親父は賛成みたいに言うからテーブルに手をついてそこを支点に親父の顔に鋭い蹴りを食らわせた。

案の定、親父は吹き飛んだが全員少し見ただけで気にしない風に食事を再開した。

「死ね親父！俺はこんなのは嫌なんだよ浮気ヤローが！」

「し、翔麻！父さんは浮気なんて・・・」

「嘘つけ！俺は知ってるぞ！前に喫茶店のバイトのお姉さんからメアドと携帯番号をもらっていただろうがッ！」

ゾクリッ

「・・・やべ」

「か、かかかか、母さん！？」

「うふ。うふふふふふ・・・あらあら、刀夜さんったら・・・」

母さん覚醒！！綺麗な見惚れるような笑顔をするが、真つ黒な笑顔をしている。

のほほんといつものように笑ってはいるが纏う空気が最悪すぎる！！

母さん！やめたげて！親父ならいいけど紫と藍も脅えてるから！

「うふふふふ。刀夜さん、少し“おはなし”しませんか？」

「母さん！？ぼ、僕は違う・・・イヤアアアアアッ！？」

ガシッ、ズルズル・・・パタン・・・

「「「「・・・・・・・・「「「」

無言。母さんが親父を引き摺ってリビングから出ていくと俺、当麻、紫、藍はそのドアを見たまま固まった。

時間にして五分。固まって時間が経つと誰からともなく全員で顔を見合わせる。

「・・・・・・・・気にするなよ？母さん、いつもあんな感じだからさ。な！当麻！」

「あ、ああ！父さん、いつもあだから母さんに折檻されるんだよ！」

「・・・・・・・・お、恐ろしい・・・・・・・・詩菜様は化け物か・・・・・・・・!？」

「さすがは翔麻のお母様・・・・・・・・」

なんか紫が光悦したような顔してるけど無視した方がいいのかコレ？

「・・・・・・・・というかどうしようかな？俺、かなりの間寝ていたから出席日数足りないんじゃないかね？」

「あ。それなら父さんがあの学校から除名して新しい小学校を探してるぞ」

「・・・・・・・・なんか嫌な予感がするのは気のせいかな？」

なんかこう・・・でかい陰謀に巻き込まれるような・・・

当たってほしくないのは学園都市入りだな。親父、いろんなパイプがあるからアレイスターさんと繋がりがあっても不思議じゃねーぞ。

朝飯を食い終わると俺達四人は俺の部屋にあがってこれから話すことにした。

俺としては旅をしたい。今の俺は弱い。当麻を守れなかった上に藍がいなければ俺は死んでいたからな。

鍛えたいんだ・・・

「・・・取り敢えず幻想郷に逝っちゃいます？」

「却下!!」

紫が可愛らしく首を傾げながら聞いてきたため、ビシッと指を突きつけて反対した。

当麻は何か、幻想郷ってなにさ？みたいに藍に聞いていた。

あんなとあるワールドより濃いキャラが満載な上に歩けば死亡フラグにぶち当たる場所なんか行きたくない！

・・・本音を言えば早苗さんとか咲夜さんとかに会いたいが・・・

「あは」

「・・・おいやめろ。そんな笑いをされると寒気がするし、嫌な予

感がビンビンするからやめれ!!」

「幻想郷に・・・逝きたいかー!」

「嫌だと言ってるだろうが!!しかも死ねと言ってるし!!」

気持ち悪い仕草をする紫とギャーギャー騒いでいると藍が当麻に説明を終えたのか、微妙な表情でこちらを見てきた。
え?マジで?そんなやついるん?怖いんですけど?って顔してるな。

「とにかく!俺は幻想郷には行かない!行ったら帰す気ないだろうからな!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ソナコトナイワヨ?」

「間が長い上に片言!信用できるか!!」

ぜえぜえと息を切らしながら紫を睨むと発情した?って聞いてきたから無表情になって無言で馬乗りになる。

顔を赤くする紫を感情のない目で見ると静かに殴り始めた。

「ああ!ドSな翔麻も・・・え?ちょっと?痛い!痛いわよ翔麻!」
「?」

「・・・・・・・・」

「翔麻！？へぷっ！痛いって・・・！」

紫が何か言ってるが聞こえないフリして殴り続ける。
後ろで当麻と藍がガタガタ震えてるが気にしない。

「・・・」

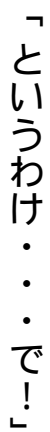
「（わ、笑ってる・・・！）」

「（翔麻様・・・凛々しいです・・・）」

「（ら、藍さん！？戻って！そっちの扉を開いたら戻れなくなるから！）」

「ら、藍！助けて！翔麻を止めて！」

藍は少し頬を染めていやんいやんをし、当麻は藍をガクガクとして正気に戻そうとし、紫は殴られながらも藍と当麻に手を指し伸ばすといった感じでかなり力オスになっていた。



パンツとテーブルを叩くとたんこぶがある藍と当麻、鼻にティッシュを詰めた紫を見る。

藍と当麻は翔麻を止めようとして返り討ちにあい、拳骨を食らったようだ。

紫は鼻血が出てたため、止血中。

「・・・残念なことに親父の陰謀により、俺達は最近出来た“学園都市”に行くことになりました・・・」

「いやいや。父さんは俺達のためにやってくれたんだぜ？なんで悪いみたいに言うんだよ？」

「当麻。学園都市は藍や紫みたいな奴がいる巢窟だと聞いたら行きたいかね？」

「・・・・・・・・・・い、嫌すぎる・・・」

「まあ、嘘だけどね」

「やっぱりか！さっきの当麻さんの緊張を返せ！できたら小遣い式で！！」

「親父からふんだくれ。脅迫ネタなんざまだあるからな」

「「「・・・・・・・・」」」

全員が思った。こいつ、悪魔過ぎる・・・

「学園都市には行くがその統括理事長とやらが俺に会いたがってるのでな。一足先に俺が行って、次に当麻が普通入学するらしいぞ」

「・・・・・・・・なんかしたのか翔麻・・・」

「さあ？」

「心当たりあるだろ！学校で暴れまくったくせに知らないフリしてんじゃねえ！！」

喚く当麻に金を渡して黙らせると下から母さんが当麻を呼んだため、当麻退室。

「・・・で、紫」

「なにかしら？」

「藍から聞いたんだけど閻魔刀持ってるってホンマ？」

「ええ・・・藍、結界をお願いできるかしら？」

「わかりました」

紫がゴソゴソとスキマに手を突っ込んで何かを探していると藍が結界を張ったのか、空気が変わるのを感じた。

ピーンと紫の頭に豆電球が出てくるとスキマから日本刀が出てきた。

・・・なんすかこれ？威圧感とかパネェんすけど。

「はい。私がデビルハンターとやらから拝借したものよ」

「・・・まさか、盗んだ？」

「いいえ。譲ってくれたのよ。“いずれは俺より使える奴が現れるからな”ってね」

・・・ダンテさんがバージルさん、ネロさんが知らんがあんた・・・
カッコ良すぎるわ。

ディアフロ・イクシオ・アザゼリア
アザゼルから言われた通りに“邪なる左”でそれに触れてみた。
するとスツと閻魔刀がそれに取り込まれるように入ると薄く、ユラ

ユラした腕の輪郭が少しハッキリし、何かが変わる感覚がした。

「おお・・・なんか体が軽いな・・・」

「・・・あら。アザゼルと似た波動が増えてるわね・・・そうだ！
まだあつたわね」

またなんか紫がゴソゴソしだすと今度はまた違う剣が出てきた。
・・・いや待て。ゆかりん、それ・・・アラストルとフォースエツ
ジじゃね？

なんでそんなにデビルメイクライから出るわけ？あんさん東方シリ
ーズの妖怪賢者だろ？
てへつと舌を出す紫を見てハリセンで叩いた俺は悪くない。

「う、うう・・・痛いわよ翔麻・・・」

「知らんがな」

取り敢えずアラストルとフォースエツを握ってみた。
中の悪魔が暴れているのか、ガタガタ震え始めるが近くにあったド
ライバー（こ）でグリグリ刀身を削るようにしたらピタッと止まり、
出しっぱなしにしてた邪なる左に吸い込まれた。

「・・・はれ？にゃんか目が・・・」

「・・・え？翔麻？ちよつと翔麻！？」

「えええええ！！？また気絶ですか翔麻様！？」

ぐわんぐわんする頭にパタリと倒れるとそのまま気絶した。
紫と藍が何か言っているのが聞こえ、原因を理解した。

・・・魔力酔いやん・・・

#8（後書き）

閻魔刀はあれだがなぜアラストルとフォースエッジまで出した？

リベリオンは？ってツツコミはなしで。

次回からゆかりんに無理矢理世界旅行されます。フラグ建てますが・
・作者はちっぱいには興味がありません。

おっぱい。胸がある女性が大好きです。

つまりは・・・（字が掠れて読めない）

#9（前書き）

世界放浪編すたーと。

まずは王女と女王から・・・

お気に入り1000件突破！ありがとうございます！！

9

「逃げる逃げる！見つかった！」

「とうかなぜ私達は泥棒なんてしてるんですか翔麻様！？」

「おほほほ！スリルがあつていいわ！！」

「黙ってください紫さま！！」

どうも。上条 翔麻、10歳童貞・・・逃げております。国家権力の人達から。

後ろを見れば赤と青のランプがピカピカ光る車が追い掛けており、俺に藍、紫はそれからダッシュで逃げている。

『止まれやクソガキ！盗んだもの返せ！』

「なんて言ってるの？俺、まだ英語とか知らないんだけど」

「えー・・・盗んだもの返さないとおしおきだぞ　だそうです」

「・・・あの外見でないわー」

国家権力の車から逃げながら藍と会話しているとでっかい川が見えてきた。

「うげ」

『ハハハハハハ！逃げられないぞクソガキイイイイツ！！』

「目測で・・・300か？行けるな」

ダダダツと走りながら橋がある場所に向かっていると藍と紫は影に入っ
て見えない場所に行くとスキマで姿を消した。
国家権力のパトカーが迫る中、足に魔力を溜めると爆発させて川を
飛び越えるようにジャンプし、川に飛び込む。
水に着水した瞬間に紫のスキマに入り、避難した。

「あゝ・・・ぺっ！少し飲んじまったな」

「災難だったわね。まさかあそこで見つかるとは思わなかったわ」

「・・・というかあからさまに警報にしか見えないボタンを押した
お前が悪い気がするのはいのせいか紫？」

「・・・さ、さあ！ゲットした霊装を見ましょうか！」

「逃げたな」

「逃げましたね」

「えーん！二人がいじめるー！」

紫が泣き始めると俺と藍はウザそうに見てすぐに目をそらし、拝借（盗んだ）した霊装を確認する。

かなりの金持ちの家に忍び込んだり、博物館にて盗まれた霊装などを取り返すついでに盗んだわけだ。

「・・・まさか簡単に手に入っただのはこれだけとは・・・っかこれ（スキマババア）がアホなことしなければもっと楽に手に入っただが・・・」

「確かにですね」

藍と霊装を確認していると紫がメソメソ泣きながら背中にへばり付いてきた。

「・・・やめろ。匂いをクンカクンカ嗅ぐな。」

「・・・ラッキーだな。まさか“エリンの秘宝”が全て手に入るって・・・しかもオリジナルだからな」

「はい。他にもロンドンでも有名な霊装も・・・でもたぶん女王には目はつけられたかと・・・」

「むにゃあああああああっ！！それは言わない約束ううううううっ！！」

俺は頭を抱えて叫ぶ。

実は、すでに会ってます。英国女王エリザードのババアに。

・・・あ。まだ言っていなかったな。

俺、いまイギリスにいます。

□
■
□
■
□
■
□
■
□

「さて。どうすべきか・・・」

「ロンドンでは指名手配されてますからね。すぐに消えた方がいいかと」

「んー、次はフランス辺りに行く？」

スキマの中で会議をする八雲主従と俺。

藍は正座、紫も正座で俺を膝に乗せて頭を撫で撫でしてやがります。

「フランスか・・・デュランダルとかなかったか？アーサー王のエクスカリバーとかカリバーンも欲しいんだけど」

「ま、また神話級の霊装を・・・翔麻様、あなたは何になるつもりですか？」

「・・・やめとこ。エリンの秘宝でもあれなのにエクスカリバーはやりすぎだわ」

手で刀身が無くなっている剣をクルクル回しながらうーむと藍と唸りながら考える。

紫は相変わらず俺を撫でるだけで何もしない。

俺がイギリスにいるのは紫のせいである。

閻魔刀を取り込んだ二日後に学園都市統括理事長であるアレクスタ―と電話で会話をすると・・・こんな感じ。

『学園都市に入りたまえ上条 翔麻君』

としか言わなかった。

見返りに高級マンションの最上階、学園都市内での統括理事会におけるある程度の地位。

さらには学園都市最先端技術の代物をタダでくれるとか・・・怪しすぎる・・・どこぞのヤミ金みたいな感じだな。おい・・・

取り敢えず拒否して統括理事会の地位と高級マンションは無しにして裏の組織に不干渉を頼み、レベルも最大で2にするという感じで契約した。

おそらく俺は当麻と同じようにレベル0になるだろうが保険だ。

イレギュラーであるからしてなんらかの能力があるかもしれないし、魔術と超能力のデメリットすら無くす可能性があるからな。

「・・・よくアレイスター許可出したな。アレイスターの性格からして断りそうなんだが」

「え？許可？ないわよ。私が勝手に連れてきたんですもの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

もぐもぐと藍から出された羊羹を食べる紫からとんでもない発言が聞こえたのは気のせいか？

許可が・・・無い？アレイスター、キレルんじゃない？

・・・やばい。BAD END直行だ！

「うばああああああああっ！！」

「ああっ！！私の羊羹が！？」

いつの間にかスキマにあったちやぶ台を蹴り飛ばすと頭を再び抱えて振り回し、発狂する。

取り敢えずアレイスターに連絡するために紫をアイコンクローするとスキマから出てアレイスターからもらった学園都市最新型携帯を取り出して電話をかける。

『・・・・・・・・もしもし。上条君かな？』

「あ、あーっと・・・すみません理事長。何も言わずに・・・」

『・・・ククッ、構わないよ。話なら刀夜氏に聞いているからね。心置きなく世界旅行を楽しむといい』

「は、はぁ・・・ホンマにすみません・・・お土産、なんかお持ちしましょうか？」

『ふむ。できたら鑑賞用がいいな。私は食べ物とかは好まないのだ』

「・・・・・・・・え？あ、はい。じゃあ何か買ったら送りますね」

『楽しみにしてるよ。上条 翔麻君』

ブツリと切れるとはーっと息をついて通話終了を押して携帯を仕舞う。

助かった・・・アレイスター、罰として解剖させるとか言いそうだったからな。親父に感謝だな

気が楽になってんーっと伸びをすると誰かに肩を叩かれる。
なんだ？と思いながら後ろを振り向くと・・・

「・・・・・・・・（ダラダラ）」

「ここに」

「にまー」

「おろおろ」

「・・・や、やあ？」

「「」どうも。今日はいい天気ですね？」

「・・・・・・・・・・逃げろっ！！」

ダダッと背中を向けて走り出すと全速力でロンドンを走り抜ける。

「・・・・・・・・ふふっ。甘いわね・・・ナイトリーダー騎士団長！！」

「御意！」

「ぎえああああああああっ！？」

アレイスターって人間っぽいところもあるんだなーって思ってた矢先にこれ。

後ろにいたのは金髪の少女？三人。青、赤、緑のドレスを着た少女？がいたのだ。

青と赤の少女・・・いやいや女性はここに笑って俺を見ており、すごい見覚えがあったからすぐに逃げた。

そしたら赤のドレスを着た女性が叫ぶといかにも紳士に見える男性が追い掛けてくるではないか！！

俺は聖人スペックで夜のロンドンの町を走り続ける。

「いたぞー！こつち・・・だぶれ！？」

「はいはい邪魔アアアアアアッ！！」

ロンドンを駆け抜けていると甲冑を纏う騎士がいたがもれなく蹴り飛ばした。

蹴っては投げ、蹴っては投げ、蹴っては蹴る。といったことをしていると先程の騎士団長とやらが羽交い締めしてきた。

「捕まえたぞおおおおおつ！！」

「でかした騎士団長！！」
ナイトリーダー

「離せ！離せやゴルルアアアアアアッ！！」

ナイトリーダー
騎士団長が羽交い締めしていると後ろから赤のドレスを着た女性が走ってくるのが見えた。
それを見ると冷や汗ダラッダラでどうすべきか頭を回転させる。

・・・あ。この体勢ならギリでやれるんじゃない？足は・・・届くな。

「離せやロリコン騎士がアアアアアアアッ！！」

「私はロリコンではない！！」

「（きゅぴん・・・チャンス！）隙あり！！」

ズドン!!

「げっ・・・ふあああ・・・っ!？」

「ふははははは! あばよロリコン騎士様よ!」

ナイトリーダー
騎士団長の股間を蹴り上げると羽交い締めされてたのが解除され、
俺は聖人の脚力で建物の屋根に飛び乗って逃走再開。

・・・どないしょ? 逃げ切れたらクーデターの時にやべー事になり
そうだなあ・・・

「どうすっかな?」

「何がかしら?」

ナイトリーダー
「ん? 騎士団長や女王に目を付けられたからどうやってロンドンか
ら逃げようかって」

「んー、それなら仕えればいいんじゃない? 貴方、中々の実力ある
みたいだし」

「はっはっは! 無理無理。だって・・・ん?」

待て。俺は誰と話してるんだ？ 屋根を走ってるから紫や藍以外は会
話など・・・

声がした、後ろを振り向くと赤いドレスを着た女性が……！！

・・・キャーリサアアアアアツ! ? なんているの! ?

「きゃー、助けてお母様ー（超棒読み）」

「我が娘に何さらすんじやあああああつ！！」

「ぎゃ あああああああああつ！？何してくれるんだこの王女
おおおおおおつ！？」

英国第二王女、キヤーリサらしき女性・・・少女かマジ微妙だが、超棒読みで言ったのに後ろから英国女王エリザードのババアがカーテナを持って追い掛けてきた。

キヤーリサを引き剥がそうとしたが鼻歌歌いながらがつしりと掴んでるから無理。

そもそも相手は天使長の力を使える英国女王。まだ身も心も不完全な聖人の俺では逃げきれない・・・

・
・
・
詰んだわ。

「チエエエエエエエエエエ！！」

「いやああああああああっ!!」

ずっどーん。

夜のロンドンに爆音が響くのであった。

#9（後書き）

考え無しに書いてしまった・・・orz

#10（前書き）

お久しぶり〜。

なんか纏まらんから一気にキンクリすることになりました〜。

10

・・・親父、お前の体質を憎むぜ・・・

「ほーう・・・中々の力を持つておるなお前さんは」

「・・・あ、あの・・・これ外してくれない？痛いんだけど・・・」

「却下だ。逃げるだろお前」

「ほっほーう・・・お前、私の専属騎士にならないか？たつぷりと可愛がつてやるよ。お前、可愛いしな」

ふいっと顔をそらして現実逃避をする。

現在、エリザードのババアに捕まり、バッキンガム宮殿の一室にて鎖を巻かれて椅子に座らされている。

周りにはエリザード、青に赤に緑のドレスを着たエリザードの娘である王女に騎士団長ナイトリーダーが俺を囲んでいる。

「アホ毛があるな。ほれほれ」

「やめっ！バカやめろ！俺のチャームポイントを弄るな！」

赤のドレス、キヤーリサに退院後に出来たピヨコンと立っているアンテナみたいなアホ毛を弄られる。

やめろと言ったが鎖に動きを制限され動けずに好き放題に弄られる。

「・・・おーっ、根性あるなこのアホ毛」

「やめれや！いてもうたるぞゴラァッ！！」

キヤーリサに頭をグツと押さえられ、アホ毛が倒されるが手を離すとピヨコンと立った。

キヤーリサやリメエアはそれが面白いのか、ペタペタ触って遊びまわっていた。

「くそっ！なんで鎖が外れないんだよ！？」

「あつはっはっは。それは英国でも最高の霊装でな？魔力とか抑えることができるんだよ」

「くっしょおおおおお！！」

ガチャガチャと鎖を鳴らしながら暴れるがエリザードのババアは笑いながら見ていた。

その顔、ムカつくぞクソババア。

・・・よし。ぶった斬るか。

「（・・・来い！閻魔刀！）」

「むっ？」

「だらっしゃああああああっ！！」

「なっ！？」

「なぜ魔力を使える！？」

閻魔刀が空間を歪めて飛び出してくると鎖を破壊し、手が自由になる。

それにより閻魔刀を掴んで振り、足の鎖も破壊して魔力を練ってエリザード達がいる場所から離れて閻魔刀を鞘に納めて構える。

・・・ついやってしまったが・・・これ、死亡フラグじゃね？

ナイトリーダー
騎士団長は殺気丸出しで剣を構えてるし。エリザードのババアはニヤニヤ笑いながらカーテナ持ってるから・・・やべ。

「はっはっはっは！まさか英国のバッキンガム宮殿で構えるとは勇氣があるな少年！・・・名前は？」

「・・・言うと思うか？エリザードさんよ」

「・・・クククッ、面白いな少年。手合わせ願えるかな？まあ、すぐに終わるだろうが」

「・・・・・・・・」

油断なく魔力を体に渡らせ、閻魔刀を握る手をしっかりと確認する。エリザードも笑いながらカーテナを構えるとバッキンガム宮殿の一室の空気が張り詰める。

「エリザードさんよ。一撃だけで勝負しないか？もし俺が勝つたり引き分けたら見逃してくれないか？負けたら俺を好きにしていーぜ？」

「・・・・いいだろう・・・・だが私は本気でやるぞ？」

「構わない。俺もどれだけ力があるか知りたいからな」

今までは紫と戦ってきたがやはりカーテナを持つエリザードとぶつかりたいものだからな。

・・・昔は戦うのは嫌だったけどが当麻の影響で戦うのに抵抗はなくなってきた。

喜んでいいのか悪いのか・・・

「（ブリーナク！『虹の手甲』！）ガントレット」

「さて・・・殺るかの？」

「ああ・・・」

ピリピリと刺すような雰囲気の中、俺とエリザードは構えながらその時を待つ。

そして・・・！

きゅ～～～～。

「あっ／＼／」

「だらっしゃああああああっ！！」

「はああああああああっ！！」

ガッッッ！！

ゴウッ！！

「（うげ！マジかよ！？聖人の筋力とか魔力も全部使ってるのにな！？エリザードのババア、化け物か！？）」

「（ほほーう。まさかカーテナの天使長の力と互角とはな・・・）」

ギキキキ・・・と閻魔刀とカーテナがつばぜり合いをしているとエ

リザードの方が背が高いため、徐々に押され始める。
化け物め・・・！紫よりも強い・・・わけないな。紫、かなり手加減してたから本当の実力、知らないし。

どちらにせよ俺はエリザードより弱いか・・・！

「ならばっ・・・！」

「ん？」

「顕せ！我がじゃあ・・・ん？」

パカッ

足元に見たことがある裂け目できた。

・・・スキマやん・・・紫、ナイスなのかバッドタイミングなのか・・・。

「にいいやあああああああっ！？」

「お、おい？」

「私の夫なので返させていただきます♪」

紫の声を聞くとそのままスキマに落ちていった・・・。

「・・・お前、空気読めないのか？」

「助けてあげたのにそれはないでしょ翔麻。あのままじゃあなた、あの英国女王に殺られるところだったわよ？」

「それは否定しないが・・・」

スキマにて待ち構えていた藍に抱かれながら紫と話す。
正直、助かったがエリザードと最後まで腕試ししたかったのは本音である。

「魔力もかなり使っちゃったしな・・・あのままじゃたぶんやられてたな」

閻魔刀を鞘に納めると仕舞った。

ディアフロ・イクシオ・アザゼリア

邪なる左の中には閻魔刀やらなんやらと色々入っていたりする。

霊装の力の源が邪なる左に宿ってるから使いこなすのも一苦労。

「どうでしょうか？エリザードとか英国は後々に関わるからあんまり悪い印象は与えたくないんだが・・・」

「そもそも翔麻は英国女王に牙を剥いたのに？閻魔刀なんか向けてたら悪い印象はビンビンでしょ」

「うつ」

「どうでしょうか？いつまでも此処にいては英国に追われますよ。エリザードは翔麻様を目の敵にされてますからね」

「それに閻魔刀とかを見せてしまったからたぶん霊装見せろって言われるわよ」

・・・最悪だ。しかも逃げたから罪がかなり重くなってるぞ。

それに閻魔刀はおそらくカーテナと同等の霊装だから目をつけられただろうし・・・。

他にもエリンの秘宝の件もあるだろうから絶対にいつまでも追われる気が・・・。

“ 神槍ブリューナク ”

“ 魔剣クラウ・ソラス ”

“ 秘石リア・ファル ”

“ ダグバの魔釜 ”

ダグバの魔釜以外は邪なる左に入れている。

エリザードと戦った時にブリューナクの力の一部を使った。

“ 虹の手甲 ”^{ガントレット}、少し弄って腕力の強化及びに霊装強化の効果付き。

「・・・取り敢えず謝ろう。エリザードを敵に回したままじゃだし」

「えっと・・・バッキンガム宮殿だったわよね？私も行こうかしら？」

「やめて。さらに混乱するから」

「むー・・・つれないわね翔麻。キスで許してあげるわよ？」

「死ね」

「ああ・・・罵られるのもいいわ・・・！」

紫は頬をピンク色に染めていやんいやんしているが寒気がする。前にも精通してないのに喰われ掛けたし・・・。

そんな紫を無視して藍とどうするか決めることにした。

藍はもう関わらない方がいいと言うが将来に当麻は間違いなくエリザードと会う。

行かないという選択肢はないだろう。当麻並のフラグ体質があれば巻き込まれる。

それにアレを完成させるにはカーテナ「オリジナルが必要だし、個人的にあの騒動には参加してみたいと欲があるし。」

「では翔麻様は英国に戻ると?」

「そうなるな。エリザードのババアと繋がりが欲しいし」

「・・・ババアなんて言うてはまずいのでは?英国女王、キレますよ」

「・・・善処、する」

藍の言う通り、やはり英国女王をババア呼ばわりしては首がさよならしそうで怖い。

「それで翔麻は英国女王の元に。私達はどうかしら藍?」

「私はついていきます。やはり翔麻様が心配なので」

「おお・・・なんか藍が天使に見えてきた・・・今なら藍と結婚し

ても・・・冗談だからそのどす黒い妖気を仕舞え紫。死ねるわ」

「ちっ、やはり最初のアドバンテージで差があるか・・・こうなれば理性と本能の境界を・・・いや、媚薬・・・ぶつぶつ・・・」

なぜだろう。親父、てめーの息子は貞操を失いそうで怖いんです。できたら紫を説得して。そして母さんに殴られる。

そんなこんなで一旦終結し、エリザードのトコに戻ることにした。・・・生きてると、いいなあ・・・。

「じゃあ紫、頼むわ・・・嫌だけど」

「りょうかいよっ」

「・・・なんで抱きつくのかわからんが・・・まあ、いいや」

紫に後ろから抱きつかれながらスキマの出口に飛び込み、エリザードのいる場所に戻る。

そして俺は・・・。

「すみませんでした」

土下座して謝ることから始めることにした。

#10（後書き）

次回は一気にキンクリ。

原作まで行くかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0243x/>

とある不幸少年の双子の兄で魔神で。

2011年11月30日20時48分発行